

研究ノート

原始仏典に見る人間像

—マッジマ・ニカーヤの出家者の生活規定とチャラカ・サンヒターの 在家や医者のあるべき姿との比較研究—

長友泰潤

南九州大学 教養・教職センター 哲学研究室

2015年10月1日受付; 2016年2月1日受理

**The description of the exemplary priest of the Majjhima-Nikāya:
Compared with the good life and the ideal doctor in Carakasamhitā**

Taijun Nagatomo

*Laboratory of philosophy, Minamikyusyu University,
Miyakonojo, Miyazaki 885-0035, Japan*

Received October 1, 2015; Accepted February 1, 2016

In the description of the exemplary priest of the Majjhima-Nikāya(MN), those who have the knowledge, obey the law and the teachings of the scripture leave the falsehood and the arrogance are the good priest.

In the description of the good life of the laity and the good doctor of the Caraka-samhitā(CS), those who are not afflicted with physical and mental ailments, who are endowed with youth, enthusiasm, strength, reputation, manliness, boldness, knowledge of arts and sciences, senses, objects of senses, ability of the sense organs, riches and various luxurious articles for enjoyment, who achieve whatever they want and move as they like, lead a happy life; others lead an unhappy life. Those who are the well-wishers of all creatures, who are truthful, peace loving, who examine things before acting upon them, who are vigilant, who serve the elders, who have full control over passion, anger, envy, pride and prestige, who are constantly given to various types of charity, meditation, acquisition of knowledge and quite life, who have full knowledge of the spiritual power and are devoted to it, lead a useful life, others do not. And one should serve the good doctor who are full of tranquility and have the knowledge of arts and sciences of the profession.

According to the above investigation, it can be maintained that there is a similarity between the view of the good life of the laity and the good doctor of the CS and the exemplary priest of the MN. The law and the teachings of the scripture that the exemplary priest obey is extension of the rule of the lay people and the good doctor.

Key words: Majjhima-Nikāya, Carakasamhitā, Exemplary priest.

序

原始仏典については、既に、スッタニパータやディーガニカーヤのあるべき人間像、すなわち、バラモンのあるべき姿とは何か、人間の破滅・幸福とは何か等について検討し、チャラカ・サンヒター（以下CS）¹⁾の人間像との比較研究を行い、その人間のあるべき姿に

ついて考察を深めてきた。ここでは、さらに、マッジマ・ニカーヤ（以下MN）²⁾に見られる人間のあるべき姿、特に、原始仏教の修行者の守るべき生活規定に示されている修行者のあるべき姿を、在家者や医者のあるべき姿についての言及が見られるチャラカ・サンヒターの説と比較し、修行者と在家者、そして医者のあるべき姿の間に、どのような違いがあるのかに着目しながら、さらに詳細に考察していく。

1. マッジマ・ニカーヤに見られる出家者の生活規定

MN の Mahāsakuludāyissutta (箭毛経 I) の中に、釈尊がラージャガハに滞在したとき、異教の出家者サルクダーインに説いた教えがある。

「またさらに、ウダーインよ、わたしは弟子たちに修行道 (paṭipadā) を説いたが、その通りに修行しているわたしの弟子たちは、他の生けるものや他の人々の心を〔自分の〕心で洞察して知る。

貪欲のある心を『貪欲のある心である』と知り、貪欲を離れた心を『貪欲を離れた心である』と知る。

怒りのある心を『怒りのある心である』と知り、怒りを離れた心を『怒りを離れた心である』と知る。

迷いのある心を『迷いのある心である』と知り、迷いを離れた心を『迷いを離れた心である』と知る。

集中した心を『集中した心である』と知り、散漫な心を『散漫な心である』と知る。

寛大な心を『寛大な心である』と知り、狭量な心を『狭量な心である』と知る。

平凡な心を『平凡な心である』と知り、無上の心を『無上の心である』と知る。

安定した心を『安定した心である』と知り、安定していない心を『安定していない心である』と知る。

解脱した心を『解脱した心である』と知り、解脱していない心を『解脱していない心である』と知る。」³⁾

ここでは、釈尊は、自らが説いた修行道を弟子たちがいかに見事に実行しているかについて述べている。弟子たちは、貪欲を離れた心、怒りを離れた心、迷いを離れた心等を知り、解脱した心を知る修行によって、解脱への道を修行に励みながら進んでいるとする。彼らが修行によって目指すものは、貪欲のない、怒りのない、迷いのない、集中した等の心を持つことである。

また、Mahāsakuludāyissutta sattamaṃ (箭毛経 II) に、同じく異教の出家者サルクダーインに説いた教えがある。その中に、道徳と題する修行者のあるべき姿についての言及がみられる。

「かれはこのように出家して、修行者たちの学ぶべきことがらと生活規定を守り、生き物を殺すことを捨て去り、生き物を殺すことから離れるようになり、棍棒や刀を置き、恥を知り、慈悲深く、あらゆる生き物に対して友好的で憐みの情をもってすごす。〔かれは〕与えられていないものを取ることを捨て去り、与えられていないものを取り、与えられるものだけを期待し、盗まないことよって清らかとなった心をもってすごす。〔かれは〕不純な生活 (abrahmacariya) を捨て去り、純潔の修行を行う者となり、〔不純な生活から〕遠ざかり、卑俗なことがらである性的行為から離れる。」⁴⁾

ここでは、生き物を殺すこと、棍棒や刀を置き、恥を知り、慈悲深く、あらゆる生き物に対して友好的で

憐みの情をもってすごすこと、盗まないこと、純潔の生活を行うことが修行者の学ぶべき生活規定とされている。

「〔かれは〕嘘をつくことを捨て去り、嘘をつくことから離れるようになり、真実を語り、約束をまもり、正直かつ誠実で、世間を欺かない者となる。〔かれは〕中傷の (pisuṇa) ことばを捨て去り、中傷のことばから離れるようになり、こちらで聞いては、こちらの人々を仲違いさせるためにはあちらで語らず、あるいは、あちらで聞いては、あちらの人々を仲違いさせるためにはこちらの人々に語らない。このようにして、仲違いした人々を和解させ、仲良くしている人々をよりいっそう仲良くさせ、和合を楽しみとし、和合した人々の中で楽しみ、和合を喜びとし、和合をもたらすことばを語る者となる。」⁵⁾

ここでは、嘘をつくことから離れ、真実を語り、約束をまもり、正直で、信頼でき、世間を欺かない者となること、そして、中傷の言葉を捨て去り、仲違いした人々を和解させ、仲良くしている人々をよりいっそう仲良くさせ、和合を楽しみとし、和合した人々の中で楽しみ、和合を喜びとし、和合をもたらすことばを語る者となることが修行者の学ぶべき生活規定とされている。

「〔かれは〕粗暴なことばを捨て去り、粗暴なことばから離れるようになり、やわらかく、聞き心地の良い、愛情にあふれ、心に響き、上品で、多くの人々に愛され、多くの人々の意に沿う、そのようなことばを語る者となる。〔かれは〕つまらないおしゃべりを捨て去り、つまらないおしゃべりから離れるようになり、ふさわしいときに語り、事実について語り、意義のあることについて語り、教えについて語り、戒律について語る者となり、心にとどまり、理にかなない、区切りがあつて、意義のあることばをふさわしいときに語る者となる。」⁶⁾

ここでは、粗暴なことばから離れ、やわらかく、聞き心地の良い、愛情にあふれ、心に響き、上品で、多くの人々に愛され、多くの人々の意に沿うことばを語る者となること、つまらないおしゃべりから離れ、ふさわしいときに語り、事実について語り、意義のあることについて語り、教えについて語り、戒律について語る者となり、心にとどまり、理にかなない、区切りがあつて、意義のあることばをふさわしいときに語る者となることが修行者の学ぶべき生活規定とされている。

「かれは、種子 (bija) の類、草木の類を傷つけることから離れるようになる。〔かれは〕一日一食で、夜〔食〕をとらず、不適切な時間に食事をとることから離れるようになる。〔かれは〕踊り (nacca)・歌・音楽という娯楽を鑑賞することから離れるようになる。〔かれは〕花輪 (mālā)・香料・塗油を身につけ、飾りたてて装うことから離れるようになる。〔かれは〕高い寝台や大きな寝台〔を用いること〕から離れるようになる。」⁷⁾

ここでは、種子の類、草木の類を傷つけることから

離れ、踊り等の娯楽を鑑賞することから離れ、飾りたてて装うことから離れ、高い寝台や大きな寝台を用いることから離れることが修行者の学ぶべき生活規定とされている。

「〔かれは〕金銀を受け取ることから離れるようになる。〔かれは〕なまの穀物を受け取ることから離れるようになる。〔かれは〕生肉を受け取ることから離れるようになる。〔かれは〕婦人や少女を受け取ることから離れるようになる。〔かれは〕男女の奴隷（*dāsīdāsa*）を受け取ることから離れるようになる。〔かれは〕山羊や羊を受け取ることから離れるようになる。〔かれは〕ニワトリや豚を受け取ることから離れるようになる。〔かれは〕象・牛・牡牛・牝牛を受け取ることから離れるようになる。〔かれは〕田畑や〔それ以外の〕土地を受け取ることから離れるようになる。」⁸⁾

ここでは、金銀や生の穀物、生肉、婦人や少女、男女の奴隷、山羊や羊、田畑などの様々なものを受け取ることから離れることが修行者の学ぶべき生活規定とされている。

「〔かれは〕伝達者（*dūteyya*）・使い走りとして従事することから離れるようになる。〔かれは〕売買することから離れるようになる。〔かれは〕重量をごまかすこと、合金をごまかすこと、寸法をごまかすことから離れるようになる。〔かれは〕賄賂・欺瞞・詐欺という不正行為から離れるようになる。〔かれは〕傷害・殺害・拘束・追い剥ぎ・略奪・暴行から離れるようになる。かれは、身体を保護するだけの衣と腹を保持するだけの施しの食べ物によって満足するようになり、どこに行くにも、まさにそれだけをもって行く。」⁹⁾

ここでは、使い走りとして仕事に従事すること、売買すること、重量などをごまかすこと、賄賂、傷害、殺害等から離れ、衣と腹を保持するだけの施しの食べ物によって満足するようになることが修行者の学ぶべき生活規定とされている。

さらに、*Devadahāsuttam* の中に、シャカ国のデーヴァダハ村で、ニガンタ派の説に、世尊が反論したという話が語られている。世尊が修行者の学ぶべきことと生活規定について言及している。

「かれはこのように出家して、修行者たちの学ぶべきことがらと生活規定を守り、生き物を殺すことを捨て去り、生き物を殺すことから離れるようになり、棍棒や刀を置き、恥を知り、慈悲深く、あらゆる生き物に対して友好的で憐みの情をもってすごす。〔かれは〕与えられていないものを取ることを捨て去り、与えられていないものを取り、与えられるものだけを期待し、盗まないことよって清らかとなった心をもってすごす。〔かれは〕不純な生活を捨て去り、純潔の修行を行う者となり、〔不純な生活から〕遠ざかり、卑俗なことがらである性的行為から離れる。」¹⁰⁾

ここでは、生き物を殺すことを放棄し、盗みを放棄し、不純な生活を捨て去り、すなわち、卑俗なことがらである性的行為から離れることが、修行者の

学ぶべき生活規定とされている。これに続けて、修行者の学ぶべき生活規定が語られているが、上記の *Mahāsakuludāyissuttasattamaṃ*（箭毛經 II）とほぼ同じ内容であり、以下は省略する。

次に、*Sāmagāmasuttam*（サーナガーマ経）の中で、チュンダ新学沙門と尊者アーナンダは、世尊の死後、ニガンタ派と同じような抗争が、仏教教団で起こることを案じて、世尊のもとに行き、世尊が、彼らに紛争を静める方法を説く。

「アーナンダよ、これら六つの教え（*dhamma*）は記憶すべきであり、愛すべきものとし、尊敬させ、あまねく包摂し、論争せず、調和させ、和合した状態に導く。六つとはどれらであるか。

アーナンダよ、ここに修行者が、清らかな行いを等しくする人たちに対して、陰に陽に、慈愛のある身体による行為（*kāyakamma*）を起こす。このことも記憶すべきであり、愛すべきものとし、尊敬させ、あまねく包摂し、論争せず、調和させ、和合した状態に導く。

アーナンダよ、さらに他に、修行者が、〔清らかな行いを等しくする人たちに対して、陰に陽に、〕慈愛のあることばによる行為（*vacīkamma*）を起こす。〔このことも記憶すべきであり、愛すべきものとし、尊敬させ、あまねく包摂し、論争せず、調和させ、〕和合した状態に導く。

アーナンダよ、さらに他に、修行者が、清らかな行いを等しくする人たちに対して、陰に陽に、慈愛のあるところによる行為（*manokamma*）を起こす。このことも記憶すべきであり、愛すべきものとし、尊敬させ、あまねく包摂し、論争せず、調和させ、和合した状態に導く。」¹¹⁾

ここでは、世尊が、紛争を静める方法を説いている。すなわち、修行者が清らかな行いを等しくする人たちに対して、陰に陽に、慈愛のある身体による行為、慈愛のあることばによる行為、慈悲のあるところによる行為を起こすことにより、和合した状態に導くとされている。

「アーナンダよ、さらに他に、修行者が正当な利得や正当な方法で得られたものや、鉢（*patta*）のなかのわずかな食べ物にいたるまでをも、〔『自分の物である、他人の物である』と〕分けて使用することがなく、戒律を守っており、清らかな行ないをとともにする人たちと一緒に使用する。このことも記憶すべきであり、愛すべきものとし、尊敬させ、あまねく包摂し、論争せず、調和させ、和合した状態に導く。」¹²⁾

ここでは、修行者が正当な利得や正当な方法で得られてもものや、鉢のなかのわずかな食べ物にいたるまで、戒律を守っており、清らかな行ないをとともにする人たちと一緒に使用することで、和合した状態に導くとされている。

「アーナンダよ、さらに他に、修行者が破壊もなく、切断もなく、斑紋もなく、雑色もなく、束縛を離れ、知者に賞賛され、固執されるところがなく、瞑想（*samādhi*）に資するところの、このような戒律のなかに、清らかな行ないをとともにす

る人たちと、陰に陽に、戒律を等しくして、暮らしている。このことも記憶すべきであり、愛すべきものとし、尊敬させ、あまねく包摂し、論争せず、調和させ、和合した状態に導く。」¹³⁾

ここでは、修行者が破壊もなく、切断もなく、斑紋もなく、雑色もなく、束縛を離れ、知者に賞賛され、固執されるところがなく、瞑想に資するところの、このような戒律のなかに、清らかな行ないをともにする人たちと、陰に陽に、戒律を等しくして、暮らしていることが和合した状態に導くとされている。

「アーナンダよ、さらに他に、修行者が聖なるもの (ariyā) であり、解脱に導き、それを行う者を正しく苦しみに消滅へ導くところの、このような見解のなかに、清らかな行ないをともにする人たちと、陰に陽に、見解を等しくして、暮らしている。このことも記憶すべきであり、愛すべきものとし、尊敬させ、あまねく包摂し、論争せず、調和させ、和合した状態に導く。」¹⁴⁾

ここでは、修行者が聖なるものであり、解脱に導き、それを行う者を正しく苦しみに消滅へ導くところの、このような見解のなかに、清らかな行ないをともにする人たちと、陰に陽に、見解を等しくして、暮らしていることが和合した状態に導くとされている。

上記のように、釈尊がラージャガハに滞在したとき、異教の出家者サルクダーインに説いた教えの中や、チュンダ新学沙門と尊者アーナンダが、世尊の死後、ニガンタ派と同じような抗争が、仏教教団で起こることを案じて、世尊のもとに行き、世尊が説いた紛争を静める方法の中で、修行者の守るべき生活規定が語られている。

2. CS の在家と医者のあるべき姿との比較研究

1) CS の在家者のあるべき姿との比較

CS には、幸福な人生と不幸な人生、そして有益な人生と無益な人生について言及がある¹⁵⁾。まず、幸福な人生は、肉体的および精神的病気に冒されていない人、とりわけ、若さを保持している人、能力にふさわしい力と勇気と名誉と、男らしさと大胆さをもっている人、知識、学問、感覚機能、感覚の対象に対して大きな力をもって生活している人、巨額の富と楽しみを享受し、あらゆる仕事に成功し、思いのままに行動する人、このような人に存在するとされる。これらとは反対の人々には不幸な人生があるとされる¹⁶⁾。

MN では、貪欲を離れ、踊り等の娯楽を鑑賞することから離れ、飾りたてて装うことから離れ、高い寝台や大きな寝台を用いることから離れること、金銀や生の穀物、生肉、婦人や少女、男女の奴隷、山羊や羊、田畑などの様々なものを受け取ることから離れることが修行者の学ぶべき生活規定とされている。一方、CS の言及では、修行者ではない人にとっての幸福な人生は、巨額の富と楽しみを享受し、あらゆる仕事に成功し、思いのままに行動する人等に存在すると言っており、これは MN の修行者のあるべき姿とかなり相違している。

次に、CS は有益な人生について述べている。有益な人生とは、あらゆる生物の福利を望む人、他人の財

産を欲しがらない人、真実を語る人、平安を旨とする人、反省する人、軽率でない人、義務、財、愛からなる人生の三つの目的を互いに矛盾なく手に入れる人、尊敬に値する人を尊敬する人、知識と学問と心の平和を自分のものとしている人、老人をいたわる人、愛欲、怒り、妬み、慢心、誇りの感情をよく制御する人、常にいろいろな布施を行う人、常に苦行し、知識をもち、心の安定している人、最高我を知る人、物事に専念する人、この世とあの世をよく考える人、記憶力と思慮にたけた人に存在するとされる¹⁷⁾。

MN でも、他の人の心を知ることによって、貪欲を離れた心、怒りを離れた心、迷いを離れた心等を知り、解脱した心を知り、この修行によって、解脱への道を修行に励むとされている。CS では、愛欲、怒り、妬み、慢心、誇りの感情をよく制御する人に有益な人生があるとされており、これは、MN のあるべき姿と類似している。また、CS では、有益な人生は、常に苦行をし、最高我を知る人に存在するとされている。この部分は、遊行期の、これは在家ではないが、最高我を求めるバラモンの姿を思わせるものであり、仏教の修行者が守るべき生活規定に通ずるものがある。

また、CS では、それぞれのカーストの人々のあり方について述べている。すなわち、バラモンは一切衆生の救済のために、クシャトリアは自己を保護するために、ヴァイシヤは生業のために、また、上位三カーストのすべての人は義務と財と愛を確保するためにアーユルヴェーダを学ぶべきであるとされる¹⁸⁾。これらの三カーストの人々のうち、最高我を知る人々、義務の道にいそむ人々、義務を伝導する人々が、アーユルヴェーダ実践者であり、父母兄弟縁者、師匠などの病気を鎮静することに努力をし、アーユルヴェーダに述べられている最高我について瞑想し、他人に知らしめ、それに従って身を処することが彼らの最高の義務であるとされる¹⁹⁾。

MN では、世尊が紛争を静める方法をアーナンダに説いている部分で、修行者は、束縛を離れ、知者に賞賛され、固執されるところがなく、瞑想に資するところの、このような戒律のなかに、清らかな行ないをともにする人たちと、陰に陽に、戒律を等しくして、暮らしている。CS では、上記のように、最高我について瞑想し、他人に知らしめ、それに従って身を処することが彼らの最高の義務であるとする。これは、戒律という言葉はないが、瞑想を重視している点で、MN の修行者の生活規定と共通のものがある。

続けて、CS では、財、愛について説明される。まず、財とは、主君や長者からじきじきに、彼らの健康を守ったという理由で財貨を与えられたり、自分を保護してもらえ、あるいは自分に保護を求めてきた人々を病気から救済してやることであり、愛とは、有識者に認められているという名誉、他人から頼られること、評判がよいこと、自分の好きな人々と健康を分かち合うことであるとされる²⁰⁾。これらは、医療行為に関わるものである。

MN では、世尊が紛争を静める方法をアーナンダに説いている部分で、修行者は、清らかな行ないを等しくする人たちに対して、陰に陽に、慈愛のある身体によ

る行為、慈悲のあることばによる行為、慈悲のあるところによる行為を起こすことにより、和合した状態に導くとあり、この行為の部分の医療行為と考えると、上記のCSの言及と矛盾しない。

2) CSの医者あるべき姿との比較

さらに、CSでは良い医者と悪い医者についての言及が見られる。医者は、医は仁術といわれるように、一般在家の人々よりも高潔であることがあるべき姿として求められると考えられる。まず、悪い医者については、邪悪な医者という災厄は大混乱を生ずるものであり、穀物などを食い荒らすウズラの大群のようなもので、知らないうちに突然襲いかかってくると述べられている。邪悪な医者に対しては、その優劣を見分けるために、前置きの会話において、八つの質問を投げかけるべきとされる。また、良い医者の能力、すなわち、真に医学を知っているものの能力はその間においても発揮されると言う²¹⁾。

さらに、悪い医者に入れられる未熟な医者の様子について述べられる。すなわち、医学の体系全体の一部しか知らず、体系において能力のない連中は、ちょうどウズラが弓の弦の音を聞いただけで逃げ出すように、タントラという言葉聞いただけで逃げていくと言われる。また、牛などの弱い動物たちのなかで、ある動物は仲間の連中が弱いので狼のごとくふるまうが、彼はほんとうの狼に近づくと本性をあらわすと言われる²²⁾。

また、悪い医者は、おしゃべりという手段をもって、信頼されるような位置に自分の身を置いている無知な人でもあるが、真に信頼される人に会うとおじけづいてしまうとされる。また、無知で学問のない医者というものは、ちょうど自分を大きく見せるために羊毛で身を覆った犬のようなものであり、優れた医者との対話においては何も言えなくなるとされる²³⁾。また、無学であっても行いは実践者としては優れている医者に対しては、良い医者は議論で打ち負かしてはならず、むしろ、学問があるとうぬぼれているような連中を、最初に八つの質問によってやっつけるべきであるとされる。また、無知でうそつきで口先ばかりの連中はたいてい、脈絡のない無駄口を多く語るものであり、口数少なく誠実な人は、筋道の通ったことをほどほどに語るものであると言われる²⁴⁾。

さらに、良い医者は医学知識をひろめるためには我欲を捨て、学問も知識も乏しいのに、おしゃべりを常とするような論者どもを容赦してはならないとされる。また、一切衆生に対する思いやりを旨とし、真理を知ることが第一とし、同情心をもっているような人々の思いは、誤った学説を阻止することにもつばら向けられると言われる²⁵⁾。

医者の中で、誤った学説や質問されると今は時機ではないとか身体の具合が悪いのでと逃げ口上を言うことや、うそやこけおどしを方便とし、他人を中傷する人は、たいてい自身の学問において未熟であるとされる。また、このような学問を汚す連中は死神の罠に等しいものであるからさけるべきであり、冷静さと知恵と学問に満たされている医者は最も医者らしい人とし

て尊敬されるべきであると言われる。あらゆる不幸は、無知に基づき、あらゆる幸福は汚れのない知恵に基づいていると言われる²⁶⁾。

このような、医者のあるべき姿についての言及は明らかに一般在家の人々より厳しく、より高潔な人間像が求められており、医学論書であるCS独特のものである。その中で、口数少なく誠実な人は、筋道の通ったことをほどほどに語るものであるという言及は、MNに見られる、修行者の学ぶべき生活規定にある、粗暴なことばから離れ、やわらかく、聞き心地の良い、愛情にあふれ、心に響き、上品で、多くの人々に愛され、多くの人々の意に沿うことばを語る者となること、つまらないおしゃべりから離れ、ふさわしいときに語り、事実について語り、意義のあることについて語り、教えについて語り、戒律について語る者となり、心にとどまり、理にかなない、区切りがあって、意義のあることばをふさわしいときに語る者となれという言及と矛盾しない。

さらに、無学であっても行いは実践者としては優れている医者に対しては、良い医者は議論で打ち負かしてはならないし、一切衆生に対する思いやりを旨とし、真理を知ることが第一とし、同情心をもっているような人々の思いは、誤った学説を阻止することにもつばら向けられ、冷静さと知恵と学問に満たされている医者は最も医者らしい人として尊敬されるべきであるとされ、明らかに一般在家の生活規定より高潔であることが求められている。このCS独特の医者についての言及も、MNに見られる、修行者の学ぶべき生活規定の嘘をつくことから離れるようになり、真実を語り、約束をまもり、正直で、信頼でき、世間を欺かない者となるべきという言及と矛盾しない。

結 論

MNに見られる人間観、特に、原始仏教の修行者のあるべき姿、即ち、修行者の守るべき生活規定と、主として在家である医者等のあるべき姿についての言及が見られるCSの説と比較し、修行者と医者や在家者の生活規定の間にもどのような違いがあるのかに着目しながら検討を行った。

MNでは、修行者の学ぶべき生活規定として、貪欲を離れ、娯楽を鑑賞することから離れ、飾りたてて装うことから離れ、金銀や生の穀物、生肉、婦人や少女、男女の奴隷、山羊や羊、田畑などの様々なものを受け取ることから離れることが説かれて。一方、CSでは修行者ではない人にとっての幸福な人生として、巨額の富と楽しみを享受し、あらゆる仕事に成功し、思いのままに行動する人にこそ存在するとされる。ここに見られるCSの考え方は、明確にMNの修行者のあるべき姿と相違しており、在家者のあるべき姿と考えられる。

しかし、これ以外の部分では、両者の言及には、類似するところも多く見られる。例えば、CSでは有益な人生とは、あらゆる生物の福利を望む人、他人の財産を欲しがらない人、尊敬に値する人を尊敬する人、

知識と学問と心の平和を自分のものとしている人、老人をいたわる人、愛欲、怒り、妬み、慢心、誇りの感情をよく制御する人、常にいろいろな布施を行う人、常に苦行し、知識をもち、心の安定している人、最高我を知る人、物事に専念する人、この世とあの世をよく考える人、記憶力と思慮にたけた人にこそ存在するとされる。一方、MNでも、他の人の心を知ることによって、貪欲を離れた心、怒りを離れた心、迷いを離れた心等を知り、解脱した心を知り、この修行によって、解脱への道を修行に励むとされる。CSの愛欲、怒り、妬み、慢心、誇りの感情をよく制御する人に有益な人生があるとすることは、MNのあるべき姿と類似しており、また、常に苦行をし、最高我を知る人に有益な人生があるとすることは、遊行期の、在家ではない、バラモン僧を思い起こさせ、その意味でより仏教の修行者が守るべき生活規定に通ずるものがある。

また、CSでは、上位三カーストの人々のうち、最高我を知る人々、義務の道にいそしむ人々、義務を伝導する人々が、アーユルヴェーダ実践者であるとされる。一方、MNでは、世尊が紛争を静める方法をアーナンダに説いている部分で、修行者は、束縛を離れ、固執されるところがなく、瞑想に資するところの、このような戒律のなかに、清らかな行ないをともにする人たちと、陰に陽に、戒律を等しくして、暮らしているとされる。CSには、戒律という言葉はないが、瞑想を重視している点ではMNの修行者の生活規定と共通のものがある。

また、CSの医者のあるべき姿についての言及では、より厳しい生活規定、より高潔な人間像が求められており、例えば、口数少なく誠実な人は、道筋の通ったことをほどほどに語るものであるとあり、これはMNの粗暴なことばから離れ、やわらかく、聞き心地の良い、愛情にあふれ、心に訴えかけ、上品で、多くの人々に愛され、多くの人々の意に沿うことばを語る者となること、つまらないおしゃべりから離れ、ふさわしいときに語り、事実について語り、意義のあることについて語り、教えについて語り、戒律について語る者となり、心にとどまり、理にかなない、区切りがあつて、意義にあることばをふさわしいときに語る者となれという修行者の学ぶべき生活規定についての言及と矛盾しない。

さらに、無学であっても、行いは実践者としては優れている医者に対しては、良い医者は議論で打ち負かしてはならないし、一切衆生に対する思いやりを旨とし、真理を知ることが第一とし、同情心をもっているような人々の思いは、誤った学説を阻止することにもつばら向けられ、冷静さと知恵と学問に満たされている医者は最も医者らしい人とされている。これも、MNの修行者の学ぶべき生活規定と矛盾しない。

このようにCSの説く、在家者、特に医者のあるべき姿には、MNの言及と同じようなものが多く含まれており、修行者ではない、在家の人々のあるべき姿、特により高潔であるべき医者のあるべき姿の延長線上に、修行者のあるべき姿があり、修行者は、在家者よりも、医者よりもさらに多くの戒律、瞑想を含む生活規定を守って修行していたと考えられる。

摘要

MNに見られる人間像、特に、原始仏教の修行者のあるべき姿、即ち、修行者の守るべき生活規定と、在家やより高潔であることが求められる医者等のあるべき姿についての言及が見られるCSの説と比較、修行者と在家者の生活規定の間にどのような違いがあるのかに着目しながら検討を行った。CSの幸福な人生とは、巨額の富と楽しみを享受することである等の言及は、MNの修行者のあるべき姿と相違しているが、CSに見られるそれ以外の言及は、MNのあるべき姿と類似しており、仏教の修行者が守るべき生活規定に通ずるものがある。このことから、在家やより厳しい生活規定を求められる医者のあるべき姿はこれであるという一般的な考え方の延長線上に、修行者のあるべき姿があり、修行者はさらにこの上に、多くの戒律、瞑想を含む生活規定を守って修行していたと考えられる。

注記

- 1) Carakasamhitā (CS) ed. by V. Bh. Sharma, Chowk-hamba Sanskrit Studies, Varanasi 1988. VOL. XCIV. 矢野道雄『インド医学概論』(科学の名著第Ⅱ期) 1988年 朝日出版. 長友泰潤「チャラカ・サンヒターのプラナーナ説」論集 (印宗学会) 第38号 pp.37-46. 2012.
- 2) Majjhima-Nikāya (以下MN). Vol. II ed. by R. Chalmers (Pali Text Society) Great Britain 2004.
- 3) MN. Vol. II p.19 1.14 ~ p.20 1.1 中村元監修『原始仏典』第六卷 中部經典Ⅲ 春秋社 2005 p.35 参照. sāvaka の訳として、声聞 (仏の声すなわち仏の教えを聞く者) という伝統的な訳も考えられる。村上・及川『パーリ仏教辞典』p.2031 参照。
- 4) この部分 (注4から注9) は、MN Vol. II では省略されているが、MN Vol. I の中部經典第27経に同じものが見られる。MN Vol. I p.179 11.22-28. 中村上掲書 p.68 参照。
brahmacariya, の訳としては、伝統的に梵行が使われるが、元来、バラモンの子弟が師の家に住んで送った、禁欲的な徒弟生活を意味した。村上・及川『パーリ仏教辞典』p.1378 参照。
- 5) この部分は省略されている。MN Vol. I p.179 11.28-35. 中村上掲書 pp.68-69 参照。
- 6) この部分は省略されている。MN Vol. I p.179 1.35 ~ p.180 1.4. 中村上掲書 p.69 参照。
- 7) この部分は省略されている。MN Vol. I p.180 11.4-9. 中村上掲書 p.69 参照。
- 8) この部分は省略されている。MN Vol. I p.180 11.9-15. 中村上掲書 pp.69-70 参照。
āmaka の訳としては、「生の」とされる。粘土、魚、肉類等にも使われた。村上・及川『パーリ仏教辞典』p.271 参照。

- 9) この部分は省略されている。MN Vol. I p.180 ll.15-22. 中村上掲書 p.70 参照.
- 10) この部分以下も省略され MN Vol. I の中部経典の第 27 経に同じものが見られる。MN Vol. I の中部経典第 27 経に同じものが見られる。MN Vol. I p.179 l. 22 ~ p.180 l. 22. 中村上掲書 p.465 参照.
- 11) MN Vol. II p.250 l. 22 ~ p.251 l. 2. 中村上掲書 p.517 参照.
- 12) MN Vol. II p.251 ll. 2-7. 中村上掲書 p.518 参照.
- 13) MN Vol. II p.251 ll. 7-13. 中村上掲書 p.518 参照.
- 14) MN Vol. II p.251 ll. 13-18. 中村上掲書 p.518 参照.
- 15) CS. Vol. I. p.598, ll. 4-7. 矢野上掲書 p.232 参照.
- 16) CS. Vol. I. p.599, ll. 23-27. 矢野上掲書 p.232 参照.
- 17) CS. Vol. I. p.599, ll. 27-31. 矢野上掲書 p.232 参照.
- 18) CS. Vol. I. p.603, ll. 29. 矢野上掲書 p.234 参照.
- 19) CS. Vol. I. p.603, ll. 29-33. 矢野上掲書 p.234 参照.
- 20) CS. Vol. I. p.603, ll. 33-36. 矢野上掲書 pp.234-235 参照.
- 21) CS. Vol. I. p.615, ll. 21-24. 矢野上掲書 p.239 参照.
- 22) CS. Vol. I. p.615, ll. 25-26. p.616, ll. 7-8. 矢野上掲書 p.239 参照.
- 23) CS. Vol. I. p.616, ll. 9-12. 矢野上掲書 p.239 参照.
- 24) CS. Vol. I. p.616, ll. 13-16. 矢野上掲書 p.239 参照.
- 25) CS. Vol. I. p.616, ll. 17-20. 矢野上掲書 p.239 参照.
- 26) CS. Vol. I. p.617, ll. 17-20. 矢野上掲書 p.239 参照.

